

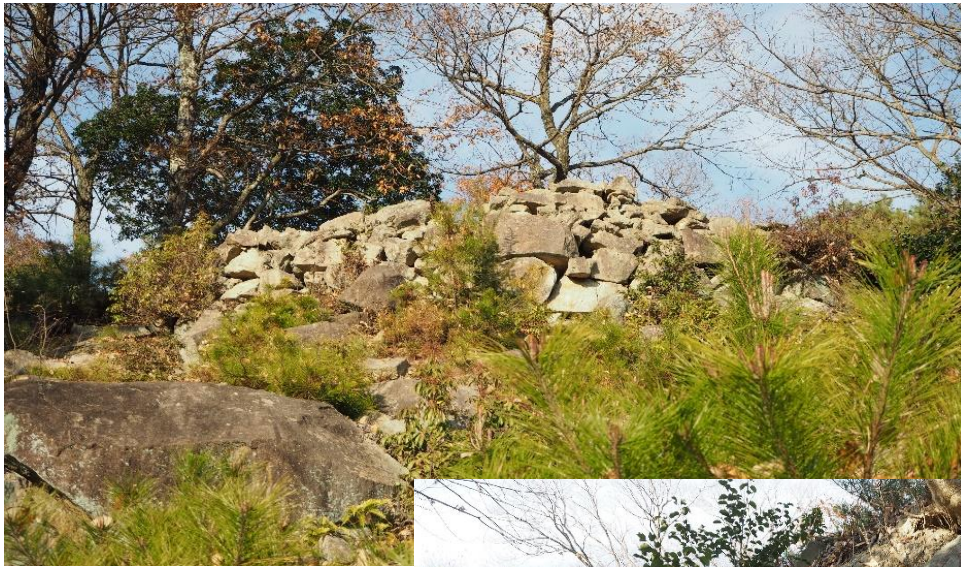
## 相生歴史マップ資料 4 感状山城

山深い相生市矢野町森の山頂に、赤松円心の三男の則祐そくゆうの築いた感状山城があります。感状山城は瓜生城とも呼ばれ、瓜生左衛門尉によって鎌倉時代に創築されました。感状山と呼ばれるゆえんは、建武3年(1336)新田義貞が足利尊氏を討つために白旗城を攻めたときに、赤松則祐そくゆうは、城にたてこもって奮戦し、新田の大軍を悩ましたので、尊氏から功を賞され、感状を与えられたことによります。その後、赤松政資まさすけのときも、応仁元年(1467)の小田垣合戦や栗賀合戦に、養子の政村とともに出陣したといわれ、近隣に武功をならしていました。しかし、天正年間(1573～1592)の秀吉の播州攻めで敗れて城は陥落しました。

感状山城の特色として①戦国山城の典型であること ②本格的な石垣構築が認められたこと ③礎石を伴う建造物が存在していること ④一曲輪くるわから北側には尾根が続いていること（一般的に尾根続きは堀切により敵の侵入を防ぐが、感状山では堀切を設けていない）⑤犬走りが石垣中段に構築されていること。⑥城の保存状態がよいこと があげられています。



羅漢の里から、感状山の登山口があります。45分ほどで曲輪の入り口に到着です。岩だらけですが、これを越えると平地になります。



南曲輪群は、自然の尾根を利用して、6つの削平地(山を人工的に削り平らにしたところ)を階段状に造っています。この曲輪群は、大手門から本城へ侵入する敵を防ぐための要所となっています。特に注目されるのが、2段目の腰曲輪こしぐるわの石垣で、感状山城跡の中でも最も大きな石垣であり、保存状態もよく全長 21m、高さ 4.5mの規模を持っています。感状山城跡の石垣の構築方法は、「野面積みのづらづみ」といわれ、自然石を 30 cm角のものから、大きいのは1m余りのものを使い、一見粗雑に積み上げたような構造となっています。近世の城に見られるような隅(角)を直角にする技法ではなく、いずれも鈍角で緩いカーブを描くことで処理しています。これらの石積みから、石垣づくりの城郭としては初期のものであると推測されています。

また、感状山落城にまつわるいくつかの落城哀話が今も村人に語り伝えられています。落城の時、城に美しい姫がいましたが、押し寄せる大軍に逃げ惑った一人は死の道ずれに日ごろ可愛がっていた金の鶏を抱いて城内の井戸に身を投げ哀れな最期を遂げました。それ以来この井戸から元旦の朝、鶏の鳴き声がするといいます。現在、その井戸は閉まっています。もう一人は運よく攻めてから逃れて、山下の藤堂で親切な里にかくまわれて暮らしました。藤堂の部落には、その後たくさんの美人が生まれるようになったのは、姫の霊の礼心ではないかと言われています。



Ⅲ曲輪跡です。この曲輪は感状山城の中腹にあり、近世の城の三の丸に相当します。曲輪群は約1メートルの石垣の段差を持ち、7段で構成されており、周囲には犬走りが配置され、感状山城の特徴を形作っています。発掘調査によると、食料保管のあった場所とみられています。城の台所に相当する部分です。

くるわ曲輪：城郭における基本的な居場所。多くの場合内部を平坦化して、周囲に対しては防御施設によって守る。



感状山城から矢野荘北側が見渡せます。まっ直ぐの道路は県道44号相生宍粟線(テクノライン)がきれいに見えます。

#### 参考

- ・相生市教育委員会編『郷土のあゆみ—相生—』（相生市役所、1972年）
- ・相生市HP「相生市の文化・歴史」  
[http://www2.aioi-city-lib.com/bunkazai/den\\_min/bunka.htm](http://www2.aioi-city-lib.com/bunkazai/den_min/bunka.htm)
- ・『兵庫山城探訪』（兵庫県考古博物館、2018年）
- ・「史跡 赤松氏城跡 感状山城跡 総石垣づくりの中世山城」（兵庫県相生市教育委員会）